

今日は降臨節第4主日です。しかし明日が12月25日、降誕日なので、一日繰り上げて降誕日礼拝を行なっています。

新しい暦B年はマルコによる福音書を中心に読みますが、降臨節第4主日には、ルカによる福音書の、マリアさんの所に天使のガブリエルが受胎告知、マリアさんが妊娠することを告げるために来た話を読むことになっています。そんなことも意識して、今日はヨハネ福音書の1章ではなく、天使のお告げのあとに展開する、マリアさんの旅のことを考えてみたいと思います。

そこで先ず今日は、以前紹介したことがあります、ユダヤの数え歌のことをもう一度話します。この数え歌は1から13までありますが、これは聖書の内容、特に旧約聖書の教えと深く関係がありますので、ちょっとそれぞれの数字が示す意味だけでも知っておいてください。今日のマリアさんとも関係があるんです。

1は誰が知っている？1は私が知っている。1は、天地を造られたわたしたちの神様。

2は誰が知っている？2は私が知っている。2は2枚の石板（トーラーの板）。

3は、3人の父祖。（アブラハム、イサク、ヤコブ）

4は、4人の母たち（サラ、リベカ、レア、ラケル）

5は、モーセ五書（創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記）

6は、ミシュナーの6巻（聖書に書かれていない、ユダヤ教の言い伝えの本）

7は、1週間の日数。

8は、割礼は生まれてから8日目。

イエス様は12月25日に誕生を祝いますから、その日から数えて8日目の1月1日には割礼を受けて、イエスという名前を付けられたわけです。主イエス命名の日というのはここからきました。

そしてその次。

9は、妊娠の月日は9ヶ月ということになっています。日本では「とつきとおか」と言いますが、それは丸9か月と10日という意味でしょうから、ほぼ同じ期間を言っています。この9か月という妊娠の期間を考えて、12月25日から9か月前の、3月25日を「マリヤへのみつげの日」として記念しています。マリアは聖霊の力によって身ごもった、とされるからです。ついでに数えると

10は、モーセの十戒。

11は、ヨセフの夢の11の星。

12は、イスラエルの12部族。

13は、神の13の性質。「6:主は彼の前を通り過ぎて宣言された。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、7:幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者。」（出エジプト34：6～7）

さて、降臨節第4主日には、今年は、ナザレの村に住むマリアさんのところに天使のガブリエルがやってきて、マリアさんが聖霊の力によって身ごもって男の子を生むことになるので、その子をイエスと名付けなさい、と告げます。これが、1年前の降臨節第4主日では、マタイによる福音書が読まれて、マリアという名前は出てきますが、話の中心はヨセフです。ヨセフに主の天使が現れて、マリアが聖霊の力によって身ごもっていること。そして男の子が生まれるのでイエスと名付けなさい、とマリアに対するメッセージと同じようなことを言います。

ただ、知っておいていただきたいことは、マタイによる福音書では、ヨセフに天使が告げた場所はナザレとは書かれていません。イエス様が生まれたところはベツレヘムですが、飼葉おけとか馬小屋とかは出てきません。おそらく、マタイの福音書ではヨセフとマリアはベツレヘムの家に住んでいた、という設定なのでしょう。そして、そこに東の国の占星術の学者たちが訪ねてきて、三つの宝物を差し出しますが、そのあと、また主の天使がヨセフの夢に現れて、ヘロデ王に殺されないために、エジプトに逃げるように告げるのです。そしてそのあと、ヘロデ王が亡くなって安全になったのでイスラエルに帰るように告げます。ただ、ヘロデ王の息子のアルケラオがユダヤの領主になったので、それを避けるために、一家はガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に行き住んだ、と説明しています。これがマタイによる福音書1章から2章に書かれているイエス様の誕生に関する記録です。

私は今日の説教の題を「マリアの旅」としました。もしマタイによる福音書に従うのなら、マリアさんはベツレヘムの近くに住んでいた。ところが、聖霊の力によって妊娠したので、婚約者のヨセフとベツレヘムで生活し、出産したのですが、東の国のお客さんたちと出会ったあとは、エジプトへ行き、ヘロデ王の死んだのを機会にナザレに移り住んだ、ということになるでしょう。

さて、今年の降臨節第4主日の福音書では、ナザレに住むマリアさんのところへ、天使ガブリエルが来て、マリアさんの妊娠とイエス様がやがて誕生することを告げますが、来年の降臨節第4主日では、マリアさんは妊娠している状態で、イスラエルの都エルサレムの西の方にあるエンカレム（ぶどうの泉）と呼ばれるところに住んでいたエリサベトを訪ねます。というのは、ナザレで天使ガブリエルからマリアは、親類のエリサベトも妊娠して6か月になっている、と知らされたからです。

マリアさんはエリサベトを訪ねて、3か月ほど留まって、その後自分の家に帰った、ということが聖書に記されています。

このルカによる福音書を基にしたマリアの旅はどうなるでしょうか。

この旅を考えるには、教会の暦が助けになるかもしれません。最初に言いましたユダヤでは女性の妊娠期間を9か月とされているので、聖マリヤへのみ告げの日を3月25日に設定しています。そしてその後、5月31日は「おとめ聖マリヤの訪問」ということになっています。そしてエリサベトが洗礼者ヨハネを産んだのは、6月24日「洗礼者聖ヨハネ誕生日」となります。

ですから、マリアさんは5月31日から3か月、8月31日までエリサベトの所にいたのでしょう。そして1か月が過ぎようとする頃エリサベトは出産し、その後の2か月も彼女の生活を助けたのでしょう。

さて、8月31日のマリアさんの状態はどうなっているのでしょうか。妊娠から5か月が過ぎて、6か月目に入ったところです。もう妊娠したおなかが目立つ頃です。このあと、自分の家に帰っていった、ということですが、ナザレからエンカレムまで直線距離で120キロくらい離れています。歩いたのか、ロバに乗ったのかわかりません。3日や4日はかかったことでしょうか。その道を帰ったのでしょうか。

ところで、私は、今は退職した司祭さんから「イスラエルに行かなければ聖書は理解できないよ」と、神学校を出たころに言われて、今までに5回イスラエルへ行きました。最初にイスラエルに行ったのは今から37年前ですが、エルサレムの街を歩くと、聖書には出てこないけど、みんなが熱心に巡礼しているアンナの教会というのがありました。アンナというのは、マリアさんのお母さんの名前です。聖書には、イエス様が両親と宮参りした時、シメオンというおじいさんとアンナという女預言者が出合いましたが、そのアンナとは違います。

イエス様の母マリアさんはこのエルサレムの街で、現在アンナの教会と言われているあたりで、母アンナから生まれた、という伝説があるのです。

つまりマリアさんの実家はエルサレムにあったということでしょう。

私は妊娠6か月目になるマリアさんがまた何日もかけてナザレに帰っては行かなかったのではないかと。

「マリアは、三か月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。」というのは、ナザレではなく、数時間で帰れるエルサレムの母の家ではないか、と思うのです。

ですから、ルカによる福音書を基にしたマリアの旅はこうだったのではないのでしょうか。

マリアはエルサレムで生まれ、ダビデの家系であるヨセフと婚約してナザレに住んでいました。その時、天使のガブリエルがお告げをして、妊娠の2か月を過ぎたころに、親類のエリサベトの出産を手伝うためにエルサレムの郊外に旅をした。そして8月末に母アンナの家に戻って、12月の出産頃もエルサレムに居たのでしょう。夫のヨセフがナザレから来て、一緒にベツレヘムで住民登録をする途中で、親切な人の家で出産をしたのです。遠いナザレから出産間際のマリアさんがベツレヘムまで何日もかけて旅をした、という風に理解するのは、すごい話にはなりますが、現実的ではないのではないかと。エルサレムのアンナの家において、そこから8キロほど離れたベツレヘムまで、それこそ日帰りくらいで登録に行ったと考えるべきでしょう。そこで出産することになったのです。その後、2月2日、イエス様が神殿でささげられる宮参りをして、シメオンや女預言者にも会い、そしてナザレに戻っていった、というのが、ルカの語るマリアの旅だと思うのです。

マタイによる福音書は、旧約のモーセのような、身の危険を生まれた時から背負わされる、大変なサスペンスドラマなのに対して、ルカによる福音書の誕生物語は、ほのぼのとした物語だと思われまふ。そして、羊飼いたちが訪ねてきた時、イエス様が寝かされていた飼葉おけですが、最近の研究では、当時のパレスチナでは、人々は自分たちの財産である家畜と同じ建物で生活するのが一般的でした。ですから、宿屋に泊まる場所はなかったのですが、親切な人が自分たちの家に迎えてくれて、安心して出産できた、というのが最近の受け取り方ようです。マタイの物語とルカの物語を、別々に理解しながらイエス様の誕生を理解していただきたいと思ひます。